

〔論文〕

現代タイ社会における呪術 ―都市の「福の神」人形ブームを事例に―

関 泰子

— 目 次 —

1. はじめに
2. 現代タイ社会に根付くクマーン・トーン信仰
3. ピー信仰とは
4. 「福の神」となったクマーン・トーン
5. 幸せを呼ぶ人形「ルーク・テープ」現象
6. 変化するクマーン・トーンのイメージ
7. 結論

キーワード：タイ社会、精霊信仰、現代社会と呪術

1. はじめに

科学技術が進歩し、近代的合理主義が社会の隅々まで貫徹していると考えられている現代社会であるが、超自然的な何かにすがりたいという人々の気持ちは変わらずに存在している。「死」を恐れた時代には、死後の世界を約束する世界宗教は人々の心を魅了したが、近代医学の発達で死への恐怖が薄らいだ現代においては、むしろ現世的・即効的「ご利益」への関心が強くなる傾向がある。筆者はかつて現代ミャンマーにおいても衰えない精霊信仰とその実践について述べたが

(関 2015: 1-30)、この傾向はミャンマーだけに見られるわけではない。渡辺恒夫・中村雅彦は、オカルトへ傾倒していく人々の特徴として、合理性と能率を再優先する現代のシステム社会に「息苦しさ」を覚え、希薄化し、透明化していく「自分のこころ」の存在感を回復しようとする動機が、オカルト的な「精神世界」への関心を生むと述べている(渡辺・中村 1998: 9)。彼らはまた他方で、神社・仏閣に賽銭を投げ込み、現世利益に則った願い事を神仏に念じる行為を、宗教における「物質崇拜」と批判している(前掲書 8)。しかし、後者の行為は前者から切り離して考えて良いのであろうか。現代世界の人々が超自然的な存在に惹かれるのは、「自分探し」のためだけではない。刻々と変化する現代社会への適応という視点から考えると、賽銭を投げ込みながら願う人々の行為とオカルトに惹かれる人々の間には、さほど違いがあるわけではない。超自然的な存在を信じる人々は、現世の利益を願いつつ、同時に自分の心のよりどころも求めるのである。

タイは、上座部仏教を信仰する国民が多数派を占める国であるが、その仏教は土着の信仰や様々な民間信仰と結びつき、庶民の間ではタイ独特の「神仏習合」的宗教実践が見られる。その中でも、モー・ピーー、モー・タムと呼ばれる東北タイ地方の呪術師は有名であり、研究者の注目を集めてきた。しかし、仏教が民間信仰と結びついているのは、農村部だけの特徴ではない。都市部やバンコク首都圏においても、人々の信仰におけるシンクレティズムは根強く存在する。こうした信仰のあり方を、都市民自身が必ずしも意識的に捉えているとはいえず、なかば無意識に慣例的に実践されていることも多い。しかし、何らかの危機的な状況に直面した時、その指向は顕現化し、多くの人々が巻き込まれる大きな社会現象となる。

前述の通り、東北部や北部の遠隔地農村、少数民族コミュニティにおける土着信仰研究の豊富さの反面、バンコクを中心とした中部タイのそれは驚くほど少ない。その中で、北原淳が、1980年代初頭のナコンパトム県ナコンチャイシー郡集落Lの守護神祭祀について記述しているのは数少ない貴重な事例である(北原 1987: 358-368)。その後、谷口裕久が同集落の守護神祭祀を中心に、種々の精霊を活用し人々に託宣を行う霊媒師(コン・ソン)の存在について調査し記述している(谷口 1995: 419-443)。北原と谷口によるこれらの調査研究は、中部タイ農村においても、土着信仰に基づく宗教実践が根強く存在していること、またそ

これらの信仰においてコン・ソンと呼ばれる霊媒師の役割が大きいこと、彼らは仏教の用語や解釈を援用することで彼らの仕事に正統性をもたせているが、その役割は東北部のモー・タムやモー・ピーーとは性格が異なることなどを明らかにしている。また、最近の北原の同集落における調査報告では、いまだに複数のコン・ソンが集落内に居住し、神と依頼人をつなぐ霊媒師の仕事を続けていると述べている。(北原2013: 13-28)。

バンコク都内の土着信仰については、津村文彦がバンコク中心部の寺院境内に祀られている後述する悪霊ナーン・ナークの社が、宝くじ当選や兵役回避を願う人々の信仰を熱心に集めていることを紹介している(津村 2002: 25-43)。産業化の進展に伴い、都市化や都市部への人口集中の進むタイ社会においては、むしろこうした首都圏の都市社会における人々のオカルティズム志向について研究する必要があるであろう。

以上の問題意識から、筆者は、2015年末から2016年初頭にかけてバンコク住民に大ブームを引き起こした願掛け人形「ルーク・テープ」を事例に、研究蓄積の少ないタイ都市部のスピリチュアリズムやオカルティズムについて考察することを目指す。

次節では、願掛け「福の神」人形の原型ともいえる「クマーン・トーン」信仰について述べ、その現代版ともいえる「ルーク・テープ」信仰が、タイに伝わる土着信仰、世界観、そして現代社会がもたらす問題や欲望とどのように結びついているのか考えたい。

2. 現代タイ社会に根付くクマーン・トーン信仰

「クマーン・トーン」。タイ社会ではおなじみの「福の神」人形である。クマーンとは「童子(男の子)」を表し、トーンは「黄金」を表す。敢えて日本語に訳すと「黄金童子」となるうか。写真1はバンコク都内寺院で作られたクマーン・トーンである。これは筆者が2015年夏、バンコク都心部にあるH寺院で千バーツ余り支払って「借用」⁽¹⁾したものである。福々しい容姿で、ワーイ(タイ風挨拶)にも瞑想する姿にも見えるポーズをとり、愛嬌のある笑顔を浮かべている。

日本の「招き猫」のように気軽な「招福」雑貨として人気のあるクマーン・トー

ンは、バンコク郊外の青空市場や旧市街の市場で、安価な値段で大量に売られている。一方、寺院で「貸し出される」クマーン・トーンは、まったく異なる存在である。クマーン・トーンは、日本の招き猫のようなお決まりのポーズやデザインはなく、クマーン・トーンを作り続けている寺院や僧侶ごとに人形の容姿が異なる。また「貸出」される前にそれぞれの寺院の僧侶によって「ヤン（護符）」の描き込みや「ブック・セーク（呪文を吹き込む）」儀礼が行われ、仏像に近い扱いである。こうして寺で作られる霊験あらたかなクマーン・トーンには、さらに毎日クマーン・トーンの霊力を高めるといふ呪文を唱える必要がある。



写真1：クマーン・トーン像（筆者撮影）

筆者がこのクマーン・トーンを手に入れた日、同行してくれたのは日本で大学教師として働いているタイ人男性P氏、そしてバンコクの名門大学の研究員をしているタイ人女性Mさんの二名であった。二人共、バンコクに生まれ育った、言わば都市中間層に属する若い世代である。筆者は梱包されたクマーン・トーンの箱を抱えて日本に帰国したが、暫く開封することなく部屋の隅に放置していた。後数日してP氏からメールが届いた。「クマーン・トーンの箱は開封しましたか。早く部屋に棚を作って祀って下さい」筆者が忙しさに紛れていい加減な返事をしていると、再度同様のメールが送られてきた。「僕は気にしていませんが、Mさんが呪文を吹き込んだクマーン・トーンをきちんと祀らないと、不幸が舞い込むと心配しています」という。どうやらMさんは呪文の力を信じているらしい。

そこまで心配されると筆者も少し不安になる。クマーン・トーンの祀り方について本で調べ、小さな棚を作り、箱から出してきたクマーン・トーンをその中に安置した。童形のクマーン・トーンへの供物は子供の好む食物、赤い色のついた飲み物と駄菓子である。供物は毎日供え、名前をつけ自分の子供のように愛情をもって祀る。そうすると祀っている者に福をもたらすというのだ。こうして何とかクマーン・トーンを飾る準備が終了した。報告のためにP君に画像を送ったところ、安心しました、という返事が返ってきた。つまり、若い世代に属する都市の高学歴層においても、クマーン・トーン信仰は一定の影響を持っているのであろう。気にしていませんと言いながら、何度もメールをよこしたP氏はMさんに

比べると半信半疑でありながら、でも強く拒絶できるほど信仰を疑ってはいない。現代タイ社会においても人々のスピリチュアル指向は、強い信仰をともなうものから、P君のような消極的なタブーの忌避まで、濃淡を有しつつ存在すると思われる。

それでは、Mさんが心配していたように、もし正しく祀らないとどうなるのか。あるいは愛情をもって育てたクマーン・トーンがその家に福をもたらさない場合はどうなるのか、それについて述べる前に、このクマーン・トーンとはそもそものどのような存在なのか、について少し説明したい。

2. ピー信仰とは

「ピー」⁽²⁾とは、超自然的な存在を総称するタイ語である。タイの伝統的アニミズムは、日本では一括りに「ピー信仰」と呼ばれるが、タイでは「ピー・サーン・テワダー」と表現されることが多い。この言葉の中に、「守護霊、祖霊、精霊、幽霊、魔神、妖怪、天使」善悪、土着・外来の神々妖怪取り混ぜ、タイ人を取り囲む諸々の超自然的な存在が全て含まれている。タイの著名な民俗学者プラヤー・アヌマーンラーチャトン³は、ピーには大きく分けて善霊と悪霊の二つに分かれるとする（プラヤー 1987：247）。常に善なる霊は、別名「テワダー」と呼ばれることもある。しかし、時に「天使」「神」と訳されることもあるテワダーであるが、人間がその意にそぐわぬ行動をすればたちまちその怒りに触れ、災厄をもたらす悪霊となる。逆に、悪霊の中には、人間がうまく祀り上げることができたら、人間の頼もしい味方になる存在もある。つまり、便宜的に善霊／悪霊と分けられているが、実際にそのピーが人間に善／害をもたらすかどうかについては、人間の行い次第ということになるのである。

例えば、タイの漁民・船乗り・運転手の間で信仰されている船霊「メー・ヤー・ナーン」は、船の材料となる硬木「タキアン木」の精霊ナーン・タキアンが、そのまま船霊となったものという説がある（関 2014:146-148）。ナーン・タキアンの宿るタキアン木は、財運のご利益があるといわれ、宝くじ当選を願う人々が集うことで知られている。ナーン・タキアンは女の精霊であるため、宝くじに当選した人は、御礼としてチュット・タイ（タイ女性が着る伝統的な衣装）をプレゼ

ントする。タイの地方を旅すると、幹に何本もの布が巻かれ（神木の象徴）、その幹や枝にチュット・タイが幾つもぶら下がっているのに遭遇することがある（写真2）。しかし、こうして人間に届けさせてくれるタキアン木の精霊であるが、怒った時は怖い。挨拶もせず勝手に木を切り倒す不心得者には徹底的に祟ると言われている。こうしたタキアン木の逸話は、タイのピーが善悪の二元論では説明できないことを明確に示している。

タイ人が最も恐れるピーの一つは産褥死した妊婦の悪霊である。産褥死や事故死のように自然死ではない死に方はタイではターイ・ホンと呼ばれ、死者が現世に未練を残すがゆえに生者に災厄をもたらすと信じられてきた。特に、出産に失敗し胎児と共に死亡（ターイ・タンクロムと呼ばれる）した妊婦の霊のこの世への未練はすさまじいと信じられている。ちなみに産褥死した女性の霊はタイだけではなく東南アジア各地で恐られる。

タイで最も有名な悪霊は、「ナーン・ナーク」（あるいは「メー・ナーク」）であろう。「ナーン」は既婚女性を示す語、「メー」は母という意味である。「ナーク」は名前であるから、日本語に訳すと「ナーク夫人」あるいは「ナーク母さん」ということになる。「ナーク」には蛇（ナーガ）の意味もあり、ヘビの化身であるナーク夫人の暗喩となっている。このナーン・ナークがまさに産褥死した女性の悪霊なのである。ナーン・ナークをめぐるストーリーは19世紀末からタイで語り継がれてきた有名な怪談であり、映画やテレビで繰り返し映像化されている。19世紀初頭のバンコク郊外プラカノーンに実在したとされる女性をめぐる伝承であるが物語には諸説あり、ただひとつ共通なのは、ナーン・ナークが現代タイにおいて「神」として祀られているということである。ナーン・ナークが生まれ育ったとされるプラカノーン村は、今ではすっかり都心（バンコク都プラカノーン区）である。マハーブット寺院境内にナーン・ナークの社が作られ、その「祭神」として祀られている（写真3参照）。「ご利益」は徴兵回避や徴兵された夫・息子の



写真2：布が巻かれ、女性用ドレスがぶら下げられているタキアン木（筆者撮影）

無事帰還⁽⁴⁾や、宝くじの当選祈願である。社内にタキアン木の大木が生えており、前述の通りタキアン木は祈願者に財運を運ぶという俗信があるため、ナーン・ナーク信仰とタキアン木信仰が重なって信仰されてきた結果かもしれない。



そしてタイにおいて妊婦の霊同様に恐れられているのが、胎児の悪霊である。伝統世界では、胎児が生まれる前に母子ともに死亡した場合、村の呪医が母子を別々に埋葬し、胎児の霊が悪霊となるのを防ぐ。死亡時に妊婦の子宮から胎児を取り出さずに一箇所に埋葬すると、死んだ胎児は悪霊となり、人々の血を飲み漁るようになるという（津村 2002：29）⁽⁵⁾。

写真3：メー・ナーク・プラカノーンを祀る社の外側ナークの肖像画や人形が多数奉納されている（筆者撮影）

タイのピー信仰、そして善悪を併せ持つタイの精霊や悪霊について長々と述べてきたが、つまり、固有名詞が付加され祀り上げられることにより神に進化した胎児のピーが「福の神」クマーン・トーンなのである。クマーン・トーンは、このターイ・タンクロムにまつわるピーである。野津は、横死した人が「なる」ものがピーだとすれば、クマーン・トーンは呪文を唱えて「作る」ものであると述べている（野津 2016）。元々のクマーン・トーンは、前掲の写真1に見られるような福々しい愛らしい顔立ちではなく、禍々しい外見の呪術人形であったことは確かである。ピーとも神とも考えられるクマーン・トーンを民衆がどのような存在として捉えてきたのか。次章で、この人形の由来について詳述する。

4. 「福の神」となったクマーン・トーン

「クマーン・トーン」はいつから「福の神」として祀られるようになったのだろうか。野津によると、クマーン・トーンの初出はタイの文学作品『クンチャー、クン・ペーン物語』における記述である。この物語は、アユタヤ時代、1491―1529年頃のラーマーティボディー2世王当時の事実に基づいて記述されたとされる物語であり、後世ラーマ2世（在位1809―1824）が宮廷に詩人たちを集めて各章を割り当てて書かせたものである（野津 2016）。元々クマーン・トーンとは、

敵を倒すためのいわば「使い魔」として、呪術によって作り出された童形のピーであった。出産時に母と共に亡くなった（ターイ・タンクロム）胎児を掘り出し、呪術をかけ蘇らせる。通説では、このような呪術は14世紀アユタヤ時代から存在していた言われている(Tasapon 2009: 6)。この呪術



により蘇ったゾンビ的使い魔クマーン・トーンは、敵を呪い殺すために作られた存在で

写真4：様々な形のクマーン・トーン
(S寺院にて 筆者撮影)

あり、このような使い魔が、「福の神」に変化するきっかけを与えたのは、ナコンパトム県にあるS寺院（後述）の住職Tであるという説がある。この住職Tが、クマーン・トーン像を農民のための田畑の番人として作り出したのがきっかけとなり（Krisana 2015: 19）、これ以降、クマーン・トーンは商売や招福の神様へと変化していったという（写真4）。

このように、ナコンパトム周辺でひっそりと信仰されていたクマーン・トーンが全国的に知られるようになったきっかけは、1990年代以降に何度かテレビ番組で取り上げられたことにある（Rankhumanit 2014:18、野津 2016）。2000年代になると、前述の『クンチャーン、クン・ペーン物語』を題材にした映画が製作され、その中でクマーン・トーンが呪術により作られ、敵を攻撃する使い魔として登場した（野津 2016）また、ビジネスマンとして成功した元芸能人たちがクマーン・トーンを信仰しており、同時にクマーン・トーンのコレクターであると語ったことで（Rankhumanit 2014:107-109 野津2016）、その知名度はさらに高まり、「福の神」イメージが定着したと考えられる。

「福の神」クマーン・トーンは、現代でも自営業者やビジネスパーソンの中で特に根強く信仰されている。その需要に応えるべく、タイ各地の寺院でクマーン・トーン像が作られているが、その中心がバンコク都に隣接するナコンパトム県である。ナコンパトム県は、バンコク都心から車で2時間ほど西に行ったところにある小さな県である（地図1参照）。ドヴァラヴァティー時代から集落が存在した古い地域であるが、現在では、首都に通勤する人々が住むバンコク都首都圏（パリモントン）の内部に位置している。

ここにはクマーン・トーン製造で有名な寺院が数か所あり、その中で最も有名な寺が前述のS寺院である。前住職（生年1891-没年1979）が、青年僧であった頃、人々の寺院への喜捨の御礼に、墓の土を使って人形を作ったのが始まりだという⁽⁶⁾。S寺院のクマーン・トーンの製法は秘法として代々の住職に継承され、外部には知られていない（Tasaphon 2009:13）。



地図1：バンコクとナコンパトムの位置（Google Mapより）

同県内にあるP寺院で作られるクマーン・トーンも有名である。昨年103才で亡くなったP寺院の先代住職が60年程前にクマーン・トーン作りを始め、その後P寺院はクマーン・トーンの寺として有名になり、現在では色々なサイズ、様々なポーズのクマーン・トーンを製造し「貸借」している（写真5、写真6）。また、この寺院は古くなったクマーン・トーンの捨て場所、供養場所としても有名である（写真7）。クマーン・トーンの作り方は、寺によって異なり、このP寺で作られているクマーン・トーンは、元々「クマーン・ソンバット」という一つの存在から、分霊しているのだという。そのため、P寺院で買い求めたクマーン・トーン



写真5：P寺院で作られた最古のクマーン・トーン（筆者撮影）



写真6：寺院内売店に並べられた色々なタイプのクマーン・トーン（筆者撮影）



写真7：P寺院内、廃棄されたクマーン・トーンの供養塔。クマーン・トーンのために購入した玩具もここに持ってこられる（筆者撮影）

ンは、購入者自らが名付けることはできず、どれもクマーン・ソンバットという名前で呼ばれる。それにしても、なぜ寺の住職が、呪術人形作りを始めたのだろうか。寺の売店担当者によると、先代住職がクマーン・トーン作りを始めたきっかけは、寺院に参拝に来る自営業者の人々が、住職手作りのクマーン・トーンを身近に置くことにより仏教の教えを思い出し、日々勤勉に過ごすことを願ったからだという。この寺に納められている不要になったクマーン・トーンは他の場所や寺院で買い求められたものであり、そのうち2割ほどは壊れてしまったクマーン・トーン、残り8割は「悪い子になった」（ご利益が全く感じられない、家に良くないことが起こる等）ため、この寺に持ってこられたものであるという（写真7⁽⁷⁾）。

これらの話から、悪霊クマーン・トーンが「福の神」に転化したのはそれほど昔の話ではないことが分かる。20世紀初頭に、寺院の僧侶たちが仏法を拡げ、人間に善をなす守り像として作り変えて行く中で、現在のような「福の神」もしくは「仏教の教えを説く神像」クマーン・トーンのイメージが定着していったように思われる。

写真でも明らかなように、クマーン・トーンは、伝統的な衣装と髪型、裸形の上半身で瞑想する姿の童子像として作られることが多いが、着衣姿や、立像、あるいは招き猫のように「おいでおいで」ポーズを取ることもある。製造者により形やポーズ、価格も異なる。町の雑貨屋や市場で販売されるクマーン・トーンは、

日本の招き猫のような「招福」人形である。しかし、こうして寺院で「貸借」されるクマーン・トーンは、雑貨ではなく神像である。理由はその製造方法にある。

前述の通りクマーン・トーンとは、生まれることなく母親の胎内で死亡した胎児を、呪術を知る者が埋葬地から掘り出し、儀式と呪文により使い魔として蘇えらせた存在であり、それが故に高い霊力を持つと考えられてきた。クマーン・トーンとして蘇らせる呪術は以下のようなものであったらしい。「寺院内の仏堂や結界を張った聖なる場所で、聖糸（サーイ・シン）を7重に巻いた建物の内部に白い布を敷き詰め、土曜日あるいは火曜日に産褥死で亡くなった妊婦の胎児を取り出し、火で炙り乾かし、最後に全体に金箔を貼りつけ、呪文を吹き込む。これを自分の最愛の息子のように慈しみ大切に祀ると、霊験あらたかな存在となる」（Tasaphon 2009：9-10）。時代を経て、このような方法で作ることが難しくなると、墓地の土や洞窟の土などを、土曜日から火曜日に亡くなった人の遺灰と混ぜ人形を作り呪文を吹き込むという方法がとられるようになる。現代のクマーン・トーンは、墓地の土を使うこともあるが、金属製、漆喰製、樹脂製等々様々な素材で作られるようになっていく。ただ、最後に必ず呪文を吹き込む。そして、出来上がったばかりの土人形に向い、「息子や、ここにいるのが父親だよ。父さんはお前を息子として欲しいのだ。父さんと一緒に行こうな。父さんはお前を大事に育てるからな」と話しかけると、人形が立ち上がり、まるで人間のように話し始めるのだという。これがクマーン・トーンである（Thasapon 2009：9）。

このように僧侶や呪術師によって作られ、呪文を吹きこまれたクマーン・トーンを譲り受けた者は、室内に安置する前に、土地神（チャオ・ティー）・屋敷地神（サーン・プラブーム）に線香をあげ、クマーン・トーンの自宅招来を報告しなければならない。安置する場所は西向きの場所や寝室の足の向く側、階段の下を避け、仏像より下の位置でなければならない。そして、クマーン・トーンに新たな名前を与える（Thasapon 2009：15）。

製法が秘密とされるため、前述の寺院においても、このような墓土を使い、特別な儀礼を施す呪法でクマーン・トーン作りが行われているのかについては不明である。ただ、クマーン・トーンはこうした恐れられる悪霊としての出自や、「墓場の土」や「人骨（幼児の骨）」といったいかにも霊に関係するような特殊な素材を練りこんでいる故に霊験あらたかなのだ、と信じる人々が多い。

しかし、現代のバンコクに住む高学歴中間層にとって、クマーン・トーンは「庶民が宝くじ当選祈願をするために買い込むもの」であり、「時代遅れ」で禍々しい俗信に満ちた存在とみなされているのも事実である。しかし、では、都会の住民は「福の神」信仰から「解放」されているのだろうか。2016年初頭にタイで起こった社会現象は、こうしたクマーン・トーンには無関心な都会人を巻き込み、「福の神」とは何かについて考えさせる重要なきっかけとなった。次節では、タイに登場した新たな「福の神」について考察する。

5. 幸せを呼ぶ人形「ルーク・テープ」現象

2016年1月。年が明けたばかりのバンコクは、赤ちゃん人形を抱える人々で溢れていた。電車やデパートの中で抱きかかえる人々、レストランでの食事の席に一緒に座らせる人々、ベビーカーに座らせて共に散歩する人々、これらの人々はみな一様にこのリアルに作られた赤ちゃん人形と共に一日の大半を過ごす。この人形の名前は「ルーク・テープ」。直訳すると「天使の子供」である。一年前には殆ど知られていなかったこの人形は、ネットでの情報拡散やメディアの過熱報道により爆発的な売れ行きを見せ始め、2015年末にはタイ全土を巻き込む大きな社会現象を引き起こしていた。そして、この人形に熱中する人々の行動が、賛否両論の世論を引き起こし、ルーク・テープ人気は社会問題化していく。



写真8：ルーク・テープ人形。アゴの部分に護符が描かれている（筆者撮影）

人々はなぜこのルーク・テープと呼ばれる人形にこれほど熱中したのであろうか。実は、この「ルーク・テープ」は僧侶や呪術師たちによって呪文が吹き込まれた「呪術人形」なのである。人形自体はリボン・ドールと呼ばれる本物そっくりに作られた中国製の赤ちゃん人形である。それに僧侶たちが護符（ヤン）を描き加え、「特別な呪文を吹き込むこと（ブック・セーク）」により、「持ち主に幸運を呼び込む呪術人形」として作り変えたのである（写真8）。当初は呪術とは

無関係に、実物そっくりのリボン・ドール好きの芸能人や有名人の小さなコミュニティが作られていた。このリボン・ドール人気は、メディアやネットを通じて次第に一般人の間にも広がっていった。そのうち、人形を寺に持ち込み僧侶に呪文を吹き込んでもらい、護符を描いてもらう人々が出始める。そして、彼らの中に、「プック・セークした赤ちゃん人形を手に入れてから幸運が舞い込んだ」「宝くじに当たった」と発言する者が出現し、こうした情報が口コミやネットの力で人々の間に拡散していった。この呪文を吹き込まれた人形たちは「ルーク・テープ」と呼ばれるようになり、幸運をもたらす人形を手に入れた人々の間で爆発的に売れ始めた。⁽⁸⁾

通常1,500バーツ（約4,500円）程度で売られているリボン・ドールは、まずルーク・テープ専用の人形店に持ち込まれ、そこで毛髪を綺麗に植え付けられ、おしゃれな服を着せられる。こうして外見を整えられてから、人形は1,800～2,000バーツ（約5,400円～6,000円）で消費者に販売される。⁽⁹⁾自分の気に入った容姿の人形を選んだ消費者は、最終段階としてそれを寺に持込み、呪文を吹き込んでもらうのだ。「（人形としての）徳を持ち」、「所有者に現金をもたらす」ために二種類の呪文が吹き込まれるという。また、ルーク・テープは「クマーン・トーン」と違い、いつも身奇麗に可愛らしい装いをさせるよう心がけていれば、特別な場所に安置し特別な供物を用意する必要もない。自由に連れて歩き、所有者が食べるものと同じものを「食べさせて」も構わない。⁽¹⁰⁾

特定の事物に僧侶が護符を書き込んだり呪文を吹き込むという行為は、タイ文化では珍しいことではない。タイの仏教はピー信仰と習合し、また様々な呪術と結びついている。例えば新車を購入すれば、車を寺院に運び込み、事故防止を祈願して、僧侶に白い香粉で車内や車体にヤン（護符）を描いてもらう。クマーン・トーンも「プック・セーク」した人形である。寺院が呪文を吹き込むのは、クマーン・トーンと変わらない。人形にヤンを描いたりプック・セークすることは、人形の形をした「御守」を作っていることに他ならないのである。

ルーク・テープも自動車同様高価な商品であるから、所有者は紛失したり壊れないよう護符を描いてもらいたくなる。一方、寺院側にしてみれば、寺を訪れる人々に仏教的慈悲の心を教えるきっかけとなる。ルーク・テープを信じる人々は、ヤンを施された人形を身近に置くことで癒やされ、希望も生まれてやる気が出て

くる。それにより現実と闘う力も湧いてくる (Krisna, 2015: 6)。つまり、ルーク・テープを買い求める人々は、人形を買えばすぐ金持ちになるという詐欺に騙されているわけではなく、こうした昔ながらの護符や呪文に守られる安心感、リボン人形を可愛がることによる癒やし、この双方により気持ちが安定し、明日を生きる活力が生まれると精神的な効果を期待しているのだということになる。もし、本当にそうであるならば、ルーク・テープはタイの文化コードの中で生み出された「御守」的な存在と考えることができる。ではなぜ、このルーク・テープ現象が社会問題とみなされたのであろうか。

2016年1月、タイ航空の子会社が、通常、飛行中は人形を座席上の棚に入れることが規則であるが、一人分の運賃を支払うのであれば、乗客にルーク・テープ用の座席購入を認める決断をしたという報道がなされ、タイ社会は大騒ぎになった。⁽¹¹⁾ タイ民間航空局は異例ともいえるほど迅速に対応をし、「人形を人間と見なすことはできず、離着陸の際にはきちんと収納する必要がある」と声明を出す。⁽¹²⁾

同じ頃、ビュッフェスタイルの大手レストランが、子供料金を支払えばルーク・テープの同席を認めるとソーシャルネットのサイトに発表し話題になる。⁽¹³⁾ さらに長距離バス会社がルーク・テープのための座席予約を認めたという報道や、ルーク・テープのための美容院、宿泊施設、ナニー、家庭教師までもが出現し、ルーク・テープ現象は異様な熱気を帯びてきた。ルーク・テープ人形の売れ行きもさることながら、ルーク・テープの外見を競う心理も増幅され、人形のブランドにこだわったり、ルーク・テープ人形用のファッション用品を買い求めたり、ブック・セーク料金として高額を支払うケースも出てきた。⁽¹⁴⁾ さらに、バンコク近郊ノンタブリー県内のある寺院がルーク・テープに気軽にブック・セークしてくれる、しかも呪文のご利益が大きいと情報が拡がり、同寺院には、連日評判を聞きつけた多くの人びとが人形を抱いて押し寄せるようになった。住職は人々にギャンブルや麻薬に手を出さない真面目な生き方を教え、気持ちが安らぐのであればと思い引き受けていたが、土日を利用した遠来の客も多く、日によっては100件を超える依頼があり、住職は終日ブック・セークに追われるようになった。⁽¹⁵⁾

ルーク・テープをめぐる国民のあまりの大騒ぎぶりに、プラユット首相が「大人はプラスチックの人形のために浪費するべきではない」と発言するにいたる。⁽¹⁶⁾ さらに、チェンマイ空港でルーク・テープ用に中国から輸入された人形の箱の中

に大量の覚せい剤が隠されていた事件も発生し（Cripps and Wong 2016）、警察はルーク・テープ人形が覚せい剤密輸の道具に使われることを危惧するようになる。⁽¹⁷⁾精神衛生の専門家は「ルーク・テープにはまり込みすぎるあまりに依存症になっているケースがある。スピリチュアルな癒やしを求めるタイ人は、寺院という公的な宗教施設を利用すべきである」と発言し、仏教界の長老たちは人形に呪文を吹き込む僧侶は、仏教の戒律違反であると批判し始めた。ほどなくして仏教局は僧侶が「ルーク・テープ」に呪文を吹き込むことを禁じるという声明を発表した。⁽¹⁸⁾この声明を受け、前述のノンタブリー県の寺院もブック・セークやヤンを行う行為を中止した。

ルーク・テープ現象が社会問題化した理由は何か。まず、この大流行をビジネス・チャンスと考える人々が多いということであろう。ルーク・テープをめぐるビジネスでいったいどのくらいの現金が動いているのかについて示す資料はない。しかし、ネットで拡散し、メディアが過熱報道することにより、ますます多くの人びとが「ルーク・テープ」ブームに巻き込まれていく。次に、ルーク・テープを「神」と考えることに警戒する考え方があるように思われる。人形を片手にヤンを描いてもらうために寺に集まる人々は、新車を持ち込む人々と変わらない。所詮人形「ルーク・テープ」は車と一緒になのである。前述のノンタブリー県の住職も、「ルーク・テープはクマーン・トーンとは異なる。絶対に供物を捧げたり祀ってはいけない」と述べている。⁽¹⁹⁾クマーン・トーンを作り続けている前述のP寺院の関係者も、最近の「ルーク・テープ」ブームに対して否定的であり、「クマーン・トーンはルーク・テープと違う」と答える。これらの発言から、逆説的にクマーン・トーンがタイ社会においてどのように捉えられているのかが理解される。クマーン・トーンはタイ固有のピーーであり神でもある。しかし、ルーク・テープはタイ文化と関わる物語をもたない外来者であり、商品に過ぎないのである。

願掛け「福の神」人形「ルーク・テープ」ブームにより、再評価されつつあるクマーン・トーンであるが、タイ人にとって「ルーク・テープ」は現代のクマーン・トーンには成り得なかったようである。

6. 変化するクマーン・トーンのイメージ

しかし、人形に呪文を吹き込むことで命を与える、という発想自体はまさにクマーン・トーンであり、この「ルーク・テープ」の流行により、クマーン・トーンに再び注目が集まる。しかしクマーン・トーンの外見にも大きな変化が現れる（写真9）。リボーン人形にクマーン・トーン独特の伝統的衣装を着せたものが人気を呼ぶようになってきたのである。



写真9のクマーン・トーンは、伝統的な衣装と額の護符ゆえにクマーン・トーンと判別

写真9：樹脂製の新しいタイプのクマーン・トーン。ルーク・テープによく似た仕様となっている（筆者撮影）

できるが、使用されている人形はルーク・テープのそれである。ルーク・テープとクマーン・トーンは違うという批判が上がっていることは先に述べた。ではなぜこうしたクマーン・トーンのルーク・テープ化が起こっているのだろうか。そしてクマーン・トーンを作り続けている人々は、この変化をどのように捉えているのであろうか。

クマーン・トーンを作り続ける人々の中には、こうしたクマーン・トーンの変化を支持する人々がいる。独自の製法を追求し、新しいタイプのクマーン・トーンを作っているモー・タム⁽²⁰⁾の男性は、時代の変化や顧客の変化に伴い、クマーン・トーン像の変化は不可避だと述べる。従来、クマーン・トーンは呪術により蘇った使い魔であり、恐ろしげな形相で作られた像が多かった。かつてクマーン・トーンを求める人々の多くは自営業者であり、そのうち90%は男性であったが、現在では買い求めにくる人の殆どが20-40代の女性であるという。若い女性の間では、怖い容貌のクマーン・トーンではなく、可愛らしさを強調したデザインを喜ばれる。つまり、需要者の年代や性別の変化が、可愛いクマーン・トーンを必要としていると述べる（Krisana 2015：21）。

このモー・タムの男性は、米国製の良質なリボーン人形を取り寄せ、それに7ヶ所の墓地の土や死んだ子供の骨をすりこんだ上、呪文を吹き込み、クマーン・トーンに仕上げるという。彼の作ったクマーン・トーン人形は、5,500パーツ

(約16,500円) から15,000バーツ (約45,000円) の高値で売れている (Krisana 2015 : 6)。

一方、クマーン・トーンを作り続けている寺院の僧侶は、現代において昔どおりの作法でクマーン・トーンを作るのは難しいと語る。よりリアルなクマーン・トーンを欲するあまりに、人骨を海外から持ち込むような違法行為につながる恐れがあるからだという (Krisana 2015 : 32)。この僧侶は、7ヶ所の墓地の土や人骨を使わず、独自の作法で可愛らしいクマーン・トーン人形を作り続けている。また、僧侶の中にも、ルーク・テープとクマーン・トーンの連続性を主張する者もある⁽²¹⁾。彼はルーク・テープを現代版クマーン・トーンであり、ルーク・テープを信じる人々を禁じることはできないと明言する。

モー・タムの男性の発言は、今、ルーク・テープやクマーン・トーンという「福を呼び込む人形」の最大の顧客が女性客であることを示している。彼は、女性たちが可愛い容姿のクマーン・トーンを好むのは、怖い姿のクマーン・トーンを怖がり、オフィスにおくと顧客がいやがりビジネスがうまくいかないからだと言明するが、果たしてそれだけであろうか。筆者には、若い女性にとって、クマーン・トーンの由来は別の意味あいを持っているように思われる。近代医学の未発達な時代とはいえ、妊婦が出産に失敗し母子共に亡くなるという悲劇は、この年代の女性にとって他人事ではない。この世に生まれ出ることのなかった胎児のピーであるクマーン・トーンは同時に、彼を無事出産することがかなわず力尽きた母親の存在を想像させる。その背景に対する心理的な忌避が背景にあるのでは、と考えるのは穿ちすぎであろうか。同時にルーク・テープ人形の爆発的流行は、彼女たちが仕事の傍らで自身の子供のように愛情を注げる特別な存在を求めているからのように思われる。

ルーク・テープや愛らしい容姿のクマーン・トーンの流行の背後には、タイにおけるソーシャル・メディアの普及が関係しているとする説もある。若者たちは、可愛らしいルーク・テープやクマーン・トーンを入手し、一緒にいる写真をネットにアップしては仲間に自慢する。また以前は、有名な寺院に出かけて譲り受ける必要があったが、今はネットで気軽に購入できる。高額赤ちゃん人形が、クマーン・トーンあるいはルーク・テープとしてネットで販売され、さらに高額の「プック・セーク」代金を別途要求する詐欺まがいのやり方が社会問題化してい

る (Krisana 2015: 17)。こうしたネット時代の事情というのも可愛い人形が流行る背景に存在している。さて、では、ルーク・テープはクマーン・トーンと同じ存在なのだろうか。そして、クマーン・トーンの外見の変化をどのように考えるべきなのか。

ルーク・テープは「注いだ愛情の大きさに応えるように福をもたらす福の神」となることを期待する「商品」として作られ、メディアやネットの力により大きなブームを巻き起こした。一方クマーン・トーンはタイの歴史文化の中から生まれた存在であり、悲惨な死や現世への未練という負のエネルギーを所有者の祀り上げで正のエネルギーに転化させる。

それゆえクマーン・トーンの変質については、当然批判もあるのであろう。しかし、若い女性たちがクマーン・トーンに注目した時点で、その変質は不可避免なのかも知れない。

7. 結論

かつて柳田国男は、日本の伝統的な習俗文化の本来の姿を農漁山村に求め、都市化とともに消えゆく存在であると考えていた。しかし実際には、民間信仰や習俗は都市社会においても存在し、都市化著しい現代日本においては、その担い手はむしろ都市社会に住む人々である。タイにおける土着信仰の研究も農村社会に集中し、都市社会のこうした民間信仰や呪術はほとんど語られることはない。しかし、日本の事例に見られるように、都市社会におけるこうした宗教実践の方が、社会に大きな影響力を持つのである。今後は、こうした都市社会における人々の宗教実践について調査研究する必要があると筆者は考える。産業化や都市化が進んでも、人々の心の中の不安や恐怖、欲望がなくなる限り、人々はこうした超自然的な存在にすがり続ける。白川によると、1990年代後半以降の呪術に関する文化人類学的研究においては、例えば現代アフリカにおける呪術の隆盛は、近代化やグローバル化がアフリカ各地の地域社会にもたらした社会・経済的変化（特にネガティブな変化）に直面した人々が、妖術などによってそうした状況が生じた理由を説明し、受け入れ可能なものにしようとする行為として考えられ、妖術などがグローバルな世界の動向と結びつきながらダイナミックに変化する動

態性に富んだすぐれて近代的なものであると見なされるという（白川 2012：12-13）。

タイの人々の語りの中で、クマーン・トーンは「テワダーなのか。ピーなのか。一体何なのか」については言及されない。ただ、クマーン・トーンを説明するために頻繁に使われる「貸借する」「ブーチャー（祀る）」という語から考えると、現代のクマーン・トーンは神であり、僧侶によって作り変えられた、仏教に帰依する存在でもある。しかし、ピーは気まぐれである。人間の思惑など鑑みず自身の感情で動く。もし、祀っても人間に何らのご利益もない、あるいはむしろ不幸なことばかり起こる場合はどうするのか。所有者は持っているクマーン・トーン像を「祀り棄て」る。「悪い子」になったクマーン・トーンは、お寺に持って行かれるのだ。その後、その所有者は新たな「良い子」を求めるか、あるいは流行りのルーク・テープに気持ちを移すのか、はたまた「福の神」を探し求めること自体をやめてしまうのか、それは個人の信心に委ねられている。

タイの人々はこうした「福の神」にすがり、そして良いことも悪いことも「福の神」のせいにする。以前よりもストレスに満ちた現代社会だからこそ、むしろ必要とされているようである。クマーン・トーンを生み出す人々も、ルーク・テープを世に出す人々も、「手に入れたらすぐに成功が訪れるわけではない」と念を押す。自分の子供のように愛情を注ぎ世話をし、日々優しく話しかけ愛情を注ぐことは、精神的な癒やしにもなる。いや、むしろ、そうして穏やかな気持で日々を送れることが、この「福の神」の隠された機能なのかも知れない。

ルーク・テープの大流行について、タイでどのように報道がなされているのか調べていくと、不景気や現代社会を生きる個々人の不安のせいにする記述が目立つ。「現代タイ人は自分に自信がなく、他人に流されやすい」から、ルーク・テープ人形ブームが起こった、という分析もある。ルーク・テープはタイ人の心のなかの欠乏感を埋めるための存在であるとともに、流行に乗り遅れたくないという心理の現れでもあるという説もある（Krisana 2015：13）。

「仏教国タイ」においても若者の間で宗教離れが起こっているという。宗教心がなくなったというより、21世紀という時代が現世的な悩みや不安や恐怖に満ちた社会だからなのかも知れない。ルーク・テープ現象やクマーン・トーンの外見の変化は、特に現代女性が抱える不安や欲望を反映しているということであろう

か。

ピヤ・ポンサピタックサンティがバンコクの大学生を対象に行なった調査によると、バンコクの大学生の7割は、「現代社会においても精霊信仰は必要」と考えているというが、その傾向は特に女子学生において高いという（ピヤ 2016：73）。

ルーク・テープ現象の背後にあるものは、ある種のスピリチュアルな信心だが、タイの女性たちが求めているのは、もはや気まぐれなピーではなく、所有者の愛情を裏切らず、常に精神的な癒やしになってくれる優しい存在なのだろう。

さて、このルーク・テープ現象は、今度どうなるであろうか。宗教局の介入で騒動は一旦落ち着いたように見えるが、この騒動で明らかになった、スピリチュアルな存在を求める若い女性たちの不安やストレスはどこに向かうのだろう。そして、かつては地方的な存在であったモー・タムやモー・ピーと呼ばれた伝統的な呪医・呪術師たちが、僧侶と共に、こうした都市の若い世代のスピリチュアルな指向の受け皿となっていることもルーク・テープ騒動の背後に見えてきた。バンコクににわかに発生した「呪術」ブームが示すものは、人々の宗教離れなのか、ポスト・モダンのアニミズムの復活なのか。土着信仰の根強い農村部と仏教の浸透した（あるいは宗教離れした）都市部、という単純な対立図式でタイの都市社会を捉えるのは大いなる誤りであろう。都市の呪術的世界は、むしろ農村部より柔軟かつ強かに存続しているように思われる。

本論文は、科学研究費補助金（基礎研究B）「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会学的研究－日本・中国・東南アジア」（研究代表者・関泰子）により2016年2月26～2月28日タイにて実施されたフィールド調査に基づく。

注

- (1) 仏像の売買が名目上禁止されているタイでは、仏像の「貸借」という言葉を用いる。販売する側は「貸与する」と言い、購入する者は「借用する」という表現を使う。しかし事実上は売買であり、その「貸与期間」は借用者が廃棄・紛失するまで「永遠」ということになる。寺院で購入するクマーン・トーンの場合、仏像と同様に「貸借」という言葉が用いられる。
- (2) ピー信仰と表記されることもある。本稿では筆者が原語により忠実な表記であると考え

「ピーー」表記を用いる。

- (3) 野津幸治によると、タキアン古木には、ナーン・タキアンが宿っているとされる一方で、雨にも日光にも強いタキアン木は木船製造や家の柱に適しているため、切り倒して使用された。その際には、必ずナーン・タキアンに供物を揚げて儀式を執り行った。儀式を怠ると家中の人が病気になるとされた（野津 2012:20）
- (4) 夫のマークが兵役に取られるが無事生還したことにちなむとされている。
- (5) このような胎児のピーーを津村は「ピーー・プラーイ」と呼んでいるが、野津によると、通常、タイ語でピーー・プラーイと呼ばれるのは、女性の霊であり、多くの場合、水中に住み、水遊びに来た人々を水中に引きずり込むとされている（野津 2012:2）しかし、ピーー・プラーイには「最も小さな霊」という意味もあり、その意味では、脂児のピーーをピーー・プラーイと呼ぶことは可能であろう。
- (6) 2016年2月27日、ナコンパトム県S寺院にて寺の関係者にインタビュー。
- (7) 2016年2月27日、ナコンパトム県P寺院にて寺の関係者にインタビュー。
- (8) Inthonchai Whanichakul, “‘Tukata luk thep’ nawatkammai thang saiyasat’
*Posttoday.com*記事、2016年1月25日（URL:<http://www.posttoday.com/analysis/report/412183>）。
- (9) Suthanya Chantha and Oraphan Keawsith, ‘Jak kumanthong su tukkata luk thep nawattam khwamchua bonsithsuwanbukhkhon?’ *Matichon online*記事、2016年1月15日（URL:http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1452777186）。
- (10) 前掲記事による。
- (11) Karla Cripps and Maggie Hiufu Wong, “Thai airline allows passengers to buy seat for ‘supernatural’ dolls, January 27, 2016, *CNN.com*, (URL: <http://edition.cnn.com/2016/01/26/aviation/thai-smile-airways-luk-thep-doll/index.html?sr=twCNN012616thai-smile-airways-luk-thep-doll/0153PMStoryLink&linkId=20677275>).
- (12) この航空会社は正式に発表を行ったわけではなく、内部メモがメディアに流し、それが大々的に報道され話題になったという。「タイでブームの人形、航空当局が「人間でない」と表明」AFPニュース（2016年1月27日）（URL:<http://www.afpbb.com/articles/-/3074819>）。
- (13) タイの有名なビュッフェ形式のレストランHが、ルーク・テープ同伴客についてフェイスブックで詳細な注書きを発表したことが話題になった。例えばルーク・テープのサイズが110cm以下であれば無料であるが、110-130cmならば子供料金を課す、他人のルーク・テープに対して人も

- 間の子供に接するように接する、等々 (*Hilight News*, 2016年1月24日) <http://hilight.kapook.com/view/132017>。
- (14) 'Konbucha aansaknoimai! 10+1 ruang thi khun mairu 'tukata lukthep' khong khlang yuk hithekh?' *Thairat online* 記事、2016年1月26日 (URL:<http://www.thairath.co.th/content/567741>)。
- (15) 'Um hae pai pluksek 'lukthep' naenwatbuakhwan' *Thairat online*, 2016年1月26日 (URL: <http://www.thairath.co.th/content/568040>)
- (16) 'Dolls that bring luck -and drugs' *The Economist*, January 30, 2016 (URL:<http://www.economist.com/news/asia/21689637-craze-haunted-dolls-starts-moral-panic-dolls-bring-luck-and-drugs?fsrc=scn/tw/te/pe/ed/dollsthatbringluckanddrugs>).
- (17) 覚せい剤の密輸だけではなく、大流行のため商品となる人形を関税を支払わず密輸するケースも発生している。('Police Seize Contraband Child Spirit Dolls' *Khao Sod English*, 26 January 2016 (URL:<http://www.khaosodenglish.com/detail.php?newsid=1453803341§ion=13>).
- (18) 'Samnakphut ok prakas ham pluksek "lukthep" thotnaksangjabsuk' *Thairat online*, 2016年1月29日 (URL:<http://www.thairath.co.th/content/570130>) 僧侶が³ルーク・テープに呪文を吹き込むことを禁じているが、一般的に行われるヤンやクマーン・トーンへのプック・セークについては言及されていない。
- (19) 'Um hae pai sek "lukthep" naenwatbuakhwan' *Thairat online*, 2016年1月26日。
- (20) モー・タムとは民間においてピーに関わる治療や除霊等を行う人々 (モー・ピー) の一種である。タイ東北地方特有のモー・ピーであり、モー=医者、タム=法、ダルマの意味であり、その名称の通り出家経験がある者が多く、仏教との関係が深いとされる。
- (21) 'Poettua watdangmuangpaknampho thamphithi pluksektukatalukthep' *Daily News* 記事、2016年1月27日 (<http://www.dailynews.co.th/regional/375509>)。

参考文献

1. 日本語文献

赤木攻・北原淳・竹内隆夫編、2000、『続・タイ農村の構造と変動-15年の軌跡-』勁草書房。

北原淳、1987、『生活の諸相』北原淳編、1987、『タイ農村の構造と変動』勁草書房所収、338-

368頁。

北原淳編、1987、『タイ農村の構造と変動』勁草書房。

北原淳、2012、「中部タイー農村における霊媒師の存在とその活動-ナコンパトム県WL行政村第4区（LL区）の場合」橋本（関）泰子編、2012、『アジアにおける精霊信仰の近代的変容-ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響-』（平成21-23年度 科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）所収、13-28頁。

白川千尋、2012、「序章 言葉・行為・呪術」白川千尋・川田牧人編、2012、『呪術の人類学』人文書院所収、9-45頁。

白川千尋・川田牧人編、2012、『呪術の人類学』人文書院。

橋本（関）泰子編、2012、『アジアにおける精霊信仰の近代的変容-ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響-』（平成21-23年度 科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）。

関泰子、2014、「タイ南部の船霊信仰」『立命館国際研究』143-165頁。

関泰子、2015、「現代ミャンマー社会における精霊信仰と「公式ナツ」をめぐる言説」『論集』（四国学院大学）、1-30頁。

谷口裕久、2000、「宗教」赤木攻・北原淳・竹内隆夫編、2000、『続・タイ農村の構造と変動-15年の軌跡-』勁草書房所収、419-443頁。

津村文彦、2002、「ナーン・ナークの語るもの-タイ近代国家形成期の仏教と精霊信仰-」『アジア経済』XLIII-1、25-43頁。

日本タイ学会編、2009、『タイ事典』めこん。

野津幸治、2012、「タイの精霊「ピー」について」『Clear Sky』(10)20-21頁。

野津幸治、2016、「クマーン・トーン信仰とは」（「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会学的研究-日本・中国・東南アジア-」平成28年度第3回研究会における研究報告）11月12日(土)、長崎県立大学シーボルト校。

プラーヤー・アヌマーンラーチャトン、森幹男訳、1987、『タイ民衆生活誌（1）-祭りと信仰-』勁草書房。

ポンサピタックサンティ・ピヤ、2016、「現代タイ社会における若者の精霊信仰にメディアが及ぼす影響-バンコクの大学生のアンケート調査をもとに-」『東アジア評論』（長崎県立大学）8、65-74頁。

渡辺恒夫・中村雅彦、1998、『オカルト流行の深層社会心理-科学文明の中の生と死』ナカニ

シヤ出版。

2. タイ語文献

Krisana Phayakorn, 2015, *Tukata lukthep*, Bangkok.

Thasaphon Jangphanichkul, 2009, *Sudyod kumanthong*, Bangkok.

Rachakhunanich Kanlong, 2011, *Kan susan ruang khwam saksit khong kumanthong nai sangkhom thai*, (Ph.D.Dissertation), Chulalongkorn University.